

大阪狭山に生きる人

賑わうホールをプロデュース 大阪狭山の音楽文化の応援団

上田 眞紀子

Makiko
UEDA

スリムで華奢、そんな体のどこから大きなエネルギーが湧き出てくるのか。音楽家の上田眞紀子さんは、新しいアイデアで民間応援団体を発足させ、持ち前のガッツ精神を駆使して大阪狭山の音楽文化をけん引しているカッコイイ女性です。ホールでのコンサート企画や、市民を巻き込んだ音楽活動への貢献度は周知のこと。地域の音楽文化に注ぐ熱い気持ちの持ち主は、「私、さやまの松岡修造よ」と笑って語る情熱派です。そのキャラクターは人を惹きつけ、仲間を共感させ、地域に音楽の刺激を与えています。



主な活動

音楽愛好家協会こんごう代表／大阪狭山混声合唱団・指導・指揮者／女声合唱団アンサンブル・リラ(堺市)・指揮者／大阪狭山少女少女合唱団・指揮者／大阪狭山市婦人会「ピーチクパーチクひばりのコーラス部」／ピアノと歌の教室「エンゼル会」主宰

今後の予定

0歳児OKコンサートは、7月はピアノ、9月管楽器、11月にはマリンバの公演が予定されている。



立ちあがったのが上田さんです。

「私たち市民の大切な文化拠点が、負の遺産になっては大変。かけがえのない財産を、みんな一緒に盛上げていかなくては」2005年7月、上田さんは、同じ思いを持つ5人の女性音楽家を中心にSAYAKAホール

の民間応援団体音楽愛好家協会「こんごう」(以下こんごう)を立ち上げ、ソフトによるホール応援をめざします。

赤字運営も覚悟の気苦勞も。

「こんごう」賛同者には感謝でいっぱい。

「こんごう」は、演奏家や音楽関係者、音楽を愛する一般市民らの賛同者を集め、会費によって演奏会を企画・運営しています。同年7月の第1回「立ち上げコンサート」を皮切りに「モーニングコ

ンサート」、外国人ピアニストによる「ワルター・ハウツィヒピアノリサイタル」と順調なスタートを切りました。今では年間15回を超えるコンサートなどを企画・運営しています。

「こんごう」創設から10年。本格的なクラシックコンサートが低価格で楽しめるということは市民の間でも定着し、主催コンサートには「第九」など大ホールが

いっぱいになるものもあります。

しかし、「低価格で質の高いもの」というスタンスを崩さないため

の出演交渉などの努力は並々ならぬものといえます。現在会員は約300人。「活動はすべて賛同者の皆さんのおかげ、感謝の気持ちでいっぱい。好きでやっているお節介、苦勞は厭いません」と「こんごう」の定番企画は、0歳児OKコンサート(年6回)、歌声

喫茶(年3回)、クリスマスやバレンタインコンサート、芸術祭参加の5つのコンサート、第九公演など。

0歳児OKコンサートは、赤ちゃんの都合でドタキャンOK。しかもワンコイン。

中でも注目すべきは、活動の柱にもなっている「0歳児OKコンサート」。概ね毎回50人前後の来場者で、すでに開催は53回(5月現在)にもなっています。

上田さんは、演奏楽器や演奏者、選曲には妥協を許さず、一貫して「ほんまもん」のレベルを貫いていると自信をのぞかせます。こ

この音楽との出会いは豊かな感性を生み育てる大切なものといえます。幼稚園への送迎時間を念頭に、おいた10時半という開演時間、子どもがごろごろできる24畳分の

上田さんは、大阪生まれの奈良育ち。小学生の頃、母親の勧めでピアノを習い始めます。特に、ピアノが得意で好きだったという記憶はないようですが、4年生の時に、教育実習生が本格的な発声で歌ってくれたことに衝撃を受け、歌うことへの興味を持ち始めたといいます。

医師になりたいという夢を抱いて奈良女子大付属中学校、高校へと進みます。しかし、当時は高校紛争の真っただ中、何かにつけ議論に明け暮れる日々が続いたといいます。意見を言い、理解を深める議論をするという上田さんの素地がしっかりと形成されました。

誘いを受けて始めた合唱部や、夢中になったオペレッタ、そんな環境の中、大阪音楽大学へと進学します。のんびりとした校風、温室のようなところに高校時代とのギャップを感じながらも、父親の勧めで卒業後は、中学校の音楽教師の道に進み教鞭をとりまします。

市歌を歌ったのがきっかけで、地域活動へと。

78年、同僚の教師だった夫との結婚を機に大阪狭山市へと。出産を経て退職、3人のお嬢さんの子育てに専念されます。

カーペットの設置、休憩時間の紙芝居と随所に配慮を感じる女性目線の設定も好評です。

いい音楽聴くと、子どもはグズらないし、皆、幸せな気持ちになれる

「子ども向けの音楽もいろいろ、普通のクラシック音楽を生で聴きたい、赤ちゃんにも聴かせたい」そんな母親の想いに応えるエッセンスを満たしたものが実現されています。「子どもは正直。だから赤ちゃんはグズらないし、反応もとてもいい」と。

この企画は、子ども連れでない来場者にも「生演奏の醍醐味はやはり格別でよかった」と十分満足できるもの、活動は、SAYAKAホールを拠点に赤ちゃんから高齢者まで大阪狭山市の音楽文化を確実に豊かに育んでいます。

地元の音楽文化の発展を願う強い心意気。そして次世代への種まき

上田さんの魅力のひとつにもあげられている指導の厳しさは、さやこんにおいても定評があります。それゆえ、意見のぶつかり合いで団員と激論になることも珍しい事ではないといいます。とにかく激論あり、檄を飛ばしての追っかけあいもあり、それでいて魅力満

87年、市制がしかれ大阪狭山市が誕生した時、市役所の依頼で市歌のレコーディングに参加。このことが、その後の上田さんの地域活動のスタートのきっかけになったといいます。

SAYAKAホールがオープン市民活動はさらに本格的に
94年、SAYAKAホール柿落し公演の一環として行われた「歓喜の詩」では、地域で初めての「市民の第九」指導にあたることに。その後、第九のメンバーらで「狭山混声合唱団(さやこん)」が結成され、上田さんはさやこんでの指導、指揮者を務めるほか、女声コーラスグループなども指導し、ゆったりと子育てをしていた日々から一転、多忙な毎日となっていきます。

SAYAKAホールを負の遺産なんて言わせない。なんとかしたい。

時代の流れか、ハコモノが負の遺産になりかねないと日本中で揶揄されていたころ、大阪狭山市民の間でもSAYAKAホール利用率の低迷や赤字財政などに不安を抱く声やさややかれ始めます。「このままやと、SAYAKAホールがつぶされてボーリング場になるっていう噂が本当になってしまふ。なんとかせなあかん」と

載の不動の人気者なのです。

2013年秋には、上田さんのたつての夢でもあった少年少女合唱団を誕生させました。懸命に稽古を重ねた子どもたちは今年5月、さやこんと共に大ホールの舞台上に立ちました。仲間とハーモニーを築いた努力や経験は、子どもたちの生涯にわたっての財産になるはずと、次世代へ引き継ぐ大切さへの熱い思いはやむことはありません。

また、クラシックへの垣根を低くしようと「さやこん」の団員らと市内小学校への出前演奏会も実施しています。子どもたちが芸術に触れる機会を作る活動にも積極的です。

常に先々を考えながらの今、思うこと

「どれもこれも立ち上げからずっとボランティアでタッグを組んできた役員の間がなければこそ出来ていることなのです。公演のことを次々に考え続けていくことは、正直、大変なこと。でも、やるからにはとことんやります」と。生きた音楽文化を地域に根付かせていくためには、まだまだ取り組んでいきたいことはいっぱいあると貪欲な気持ちは並々ならぬものです。